

わが19世紀イギリス史研究

——一つの自分史——

村 岡 健 次

◆はじめに

このほど旧知の瀧澤秀樹先生から、本誌のコラム「パレット」に一文を依頼された。だがわたしは今日まで、本誌の発行元である大阪商業大学とは何のかかわりもなく、またとくに本誌が掲げる「地域研究」なるものに携わったこともない。そういう門外漢であるので、まず簡単に自己紹介から始めたいと思う。

わたしは西洋史研究者ということになっていて、今日まで近代イギリス史、それも19世紀を主たるフィールドに研究をしたり教えたりしてきた。出身は京都大学文学部史学科、研究歴は大学院時代から数えると今年で43年、この3月とうとう定年に達し、甲南大学文学部を退職する次第となった。考えてみれば、大学院を出て大学の先生になればこうなるのが普通で、とりたてていうことではないのかもしれない。だがそれでも定年となってみれば、よくもまあ近代イギリス史という世間一般から見れば相当に特殊な対象に目をむけてそのことばかり、こんなに長くやってきたものだな、とは想う。その個人的な経験の一端を本誌に語る（それがこのコラムの趣旨と承った）にどれほどの意味があるのか、心中わたしははなはだ心もとないのだが、以下瀧澤先生のご好意に依って、わたしがどうして19世紀のイギリス史をフィールドとするようになったのか、また今日までどのような姿勢で研究をしてきたのかということにつき、少し述べてみようと思う。

◆19世紀のイギリスをフィールドに選んだわけ

わたしがどうして近代イギリス史研究、それもとりわけ19世紀をやるようになったのかということについては、大きく二つの理由がおもひあたる。

その第一は、わたしがもともと下層中流階級出身の近代主義者で、西洋の近代に強い憧れをもっていたことである。わたしは1935年、鎌倉市のとある神社の神職の家に生まれた。その神社は御霊神社（あるいは権五郎神社）といい、当時あった社格でいえば村社であった。多少物心がつき始めたころから、わたしは、村鎮守の神職というわが家の稼業にある種の反発を覚え、それを恥ずかしいと思うようになった。子供の

わたしには、父親のその職業が庶民の迷信に寄生して彼らを収奪しているように思えたのである。今にして想えば随分偏向した考えをもったものだが、察するに近隣の住民に東京への通勤者が多く、氏子である地元の子供たちだけでなく、その東京通勤者の子供たちとも日々交わる環境がわたしのなかに近代主義とある種の合理主義を生み、それらが家業の神職にたいするそのような反発と羞恥心を育んだのであった。そのような少年が農漁村よりは都会に、古いものよりは新しいものに、伝統的な日本文化よりはモダンな西洋に憧れたとしても、それは自然の成り行きというものだろう。

またもう一つ、終戦直後の状況が印象に残っている。わたしの小学校時代（当時は国民学校といった）は、太平洋戦争と重なっており、一年生のときに戦争が始まり、五年生のときに終戦を迎えた。その後数年間、日本の庶民は飢餓と貧困に苦しみ、わけても都市生活者は竹の子生活の悲哀を味わった。だが国破れても、周囲にはいまだ白砂青松の自然があり、胃の腑は空でも、少年の心には希望が満ちあふれていた。いやもう希望しかなかった、といった方が正しいのかもしれない。そしてそこに西洋が、ララ物資をともない、占領軍のG I文化に担われて怒涛のように押し寄せた。ジープとアメリカ兵、Give me chocolateという英語、あちこちに出現したOFF LIMITSの標示板、パンパンと呼ばれた女性たち（彼女たちのしゃべる英語はパングリッシュといわれた）、‘This is Far East Network Tokyo.’ (FEN) のラジオ放送、民主主義、六三制教育（わたしの年代はその第一期生で、「六三制のモルモット」といわれた）、軍歌や軍国的歌謡に代わって現れたアメリカ・イギリス・ドイツ民謡の音楽教材、テネシー・ワルツ、チャック・ヤングの漫画『ブロンディ』、ダニー・ケイ主演の映画『虹をつかむ男』、ホワイト・クリスマスを唄うビング・クロスビー、などなど。そして以後、高度成長期が終わる1970年代にいたるまで、わたしは西洋にたいする憧れをそのままもち続けたように思う。73年3月、わたしはそこ勤めていた和歌山大学で念願の文部省在外研究員に選ばれ、「ハンザの風^{ルフト}」に乗って西ドイツを訪れた。そしてそこで早春のライン川を眺めたとき、ああ、ついに憧れの地を踏んだ、と思ったものである。

わたしが近代イギリス史を専攻するようになった第二の契機は、学部学生から大学院に進み西洋史研究を始めた1950年代後半から60年代にかけての状況にある。当時の日本西洋史学界は、多少下火になり始めていたとはいえ、それでもなおいわゆる大塚史学の強い影響下にあり、それを中心に回っていた。戦前の講座派の系譜を引くこの史学は、周知のとおり、近代イギリスを資本主義が自生的それゆえ典型的に発展した最先進国とみる近代化史観であった。学部学生るとき、わたしには大学院に進学する意思はまったくなかったが、それでも（あるいは、むしろそれゆえに）この近代化史観にひきつけられた。卒業論文を作成するにあたってわたしは、大塚久雄『株式会社発生史論』（中央公論社、1947年）、同『近代欧州経済史序説』上の一・二（弘文堂、

◆パレット◆

1951-2年)を読み、T.S.Willanの2冊の近作¹⁾を頼りに、四苦八苦してなんとか「ロシア会社」に関する一論をまとめあげた。だが話はそこで終わらない。わたしは就職に失敗し、59年4月、仕方なく、だが辛うじて大学院にもぐりこんだが、そこでイギリス留学から帰ったばかりのわが師越智武臣先生(当時助教授)と出会ったのである。先生はR・H・トーニーによりつつ、近代イギリスのトレーガーをヨーマンリ(独立自営農民層)と捉える大塚史学を批判してジェントリを対置するだけでなく、マックス・ヴェーバーのピューリタニズム解釈をも批判して、果敢にも大塚久雄氏と全面的に対決する姿勢を打ち出していた²⁾。わたしは弟子になっても先生のヴェーバー理解はついに首肯しえなかったが、ジェントルマン(=ジェントリ)を近代イギリス(必ずしも資本主義ではない)の重要な担い手と考える先生の史観からは大きな影響を受けた。わたしの今日にいたる研究課題の一つは、19世紀イギリスにおけるジェントルマン支配の有りようを確定することであったが、わたしはこの課題を越智先生からいただいたと思っている。

というわけでわたしは、近代イギリス史へと自分の進路を定めたのであるが、それでは本格的に研究を始めた大学院進学以後、近代イギリス史のなかでもどうして19世紀を選んだのかということになると、これはまた別の理由によっている、というべきだろう。その一つは、思うにわたしが戦後の都会育ちであったからで、わたしには近代とは、端的に言って大塚史学や越智先生が取り組む16-17世紀の農村社会であるよりはすぐれて産業革命以後の、工業化と都市化の進む19世紀であると観念されていた。またもう一つの理由は、当時においては圧倒的な大塚史学の影響の下に封建制から資本主義への移行期である15-17世紀に研究者が集中して19世紀ははなはだ研究の手薄な領域となっていたからであった。その当時の19世紀イギリス史研究といえば、議会史専攻の中村英勝氏や政治学畑の横越英一氏の少数単発的な業績³⁾があるくらいなもので、あとはマルクス主義経済学の隆盛を反映して労働運動史の研究がそれ相応に行われているといった状況にあった。という次第でこのフィールドは、当時はいまだ処女地のごとき観を呈していたのであり、ならばとわたしは心に決めて、19世紀イギリス史研究に踏み込んだのであった。

◆自分探しの時代

大学院から30代初めにかけての時期は、歴史研究者としての自己を発見してゆく、平たくいえば、自分探しの時代だった。

わたしは修士論文のテーマに、労働者階級の参政権獲得運動として知られるチャーティズムを選んだ。先述のように、当時19世紀イギリス史研究の分野では、労働運動史がもっとも研究者の関心を集めており、レーニンによって「最初の広範な、本当に

大衆的な、政治的に形態を整えたプロレタリア的革命運動」⁴⁾と定義づけられたチャーティズムは、わたしの目にも19世紀イギリス史の最大の事件であるように思われた。だが史実に即して研究を進めていくうちに、わたしは、チャーティズムを革命運動と捉えるレーニンの定義があくまでもマルクス主義の立場からするものであることを理解するようになっただけでなく、その定義自体も必ずしも適切ではないと考えるようになった。その修士論文をもとにして活字となったわたしの処女論文(「チャーチスト運動の歴史像」『史林』44-6、1961年)は、今読み返してみるに、どう見ても誉められた出来ではないが、わたし自身には大きく二つの収穫があった。その一つは今述べたように、具体的な歴史研究の実際を通して、わたしはマルクス主義を一つのイデオロギーとして明確に相対化できるようになった、ということである。それは同時にマルクス主義がわたしの立場ではなく、わたしの立場がまさに友人のマルクス主義者たちのいうノン・ポリ、日和見主義のそれであることを自覚することでもあった。またわたしはこのころキリスト教に興味を覚え、初めて聖書を読み、教会にも出かけたが、そのこともここで書きつけておく必要があるだろう。大学生になったとき、少年期この方宗教に懐疑的であったわたしは、マルクスがいったという「宗教はアヘンである」という言葉に飛びつき、以来それを端緒に史的唯物論やマルクス主義経済学の講義を聴き、それなりにその関連の本も読んできた。だがこの期にいたってわたしは、自分の宗教観の歪みに気づくようになり、「宗教はアヘンである」という言葉も、わたしには意味のないものとなってしまった。

修士論文のもう一つの収穫は、直接19世紀イギリス史の理解にかかわる。わたしはこの決して成功したとはいえないチャーティズム研究を通じて、その後わたしが採るべき19世紀イギリス史研究の進路を確定することができた。チャーティズムは、1830年代後半からそれに続く通称「飢餓の40年代」にかけて、10年以上にわたって展開された。だがチャーティズムは、D・G・H・コールが「蠅螂の斧」と評したように⁵⁾、結局のところ、何ら所期の目的を達成することなく、50年代からの「繁栄の時代」の到来を迎えて瓦解してしまった。そのことは、チャーティズムについてはよく知られた教科書的な事実なのだが、わたしはこの事実のなかに一つの重大な意味を読みとった。というのもそのことは、いいかえれば、当時工業化の最先進国であったイギリスの労働者階級は、レーニンのいう「広範な、本当に大衆的なプロレタリア的革命運動」を展開したにもかかわらず、ときの支配階級からは何の譲歩も引き出せないまま跳ね返されてしまったのだということを意味しており、だとすればチャーティズムの向こうには、そんなことではビクともしない、はなはだ強固な支配体制がある、ということにならざるをえない。それを研究のターゲットとしないでどうして19世紀のイギリスが理解できるのか、というのがわたしのたどり着いた結論であった。こうしてわたしは、大学院の博士課程では保守主義者のベンジャミン・ディズレーリと政党史を研

究テーマに選び、以後19世紀イギリスの支配構造の解明に向かった。だがこの新しい研究領域においても、大塚史学に棹さすマルクス主義の理解がなお大きな影響力をもっており、わたしはそれと向き合わなければならないことになった。

◆記憶に残る一つの事件

それはわが自分史のうえでは、記憶に残る一つの事件であった。

周知のようにイギリスは、18世紀後半から19世紀の30年代にかけて世界で最初に産業革命を達成した国で、19世紀のイギリスは、「世界の工場」と称えられた工業化の最先進国であった。この工業化のもっとも主導的な担い手は中流階級のブルジョワジーで、本来彼らの政治経済哲学であった自由主義は、広く19世紀イギリスの一般的な世論となり、一つの特色ある文化をさえ形づくった。それではこの時期の支配階級は誰であったのかというと、それが問題で、それについての理解は、厳密に言えば史家によりいろいろであったが、巨視的には大きく二つに分類されえた。一つはそれをブルジョワジーとする捉え方で、大塚史学の影響の強かった終戦から60年代にいたるわが国の歴史学界では、この捉え方が一つの通説となっていた。というのもこの捉え方を最初に打ち出したのが、まさに19世紀中葉のイギリスにあって『資本論』を構想していたマルクスその人であったからで、したがってそれは、彼の哲学を奉じたマルクス主義者、それゆえわが国では講座派の系譜をひく戦後史学の大塚史学、さらにはその影響を強く受けた研究者の捉え方となったのであった。

もう一つの捉え方は、19世紀イギリスの支配階級を、産業革命以前からのこの国の支配階級、すなわち大土地所有者の地主階級（有爵貴族とジェントリ）を中核とするジェントルマン階級とする見方で、端的にいうなら、それがわたしの捉え方であった。先述のように、19世紀におけるこの階級の支配の有りようを確定することが、越智先生からいただいたわたしの課題だったのである。この捉え方は、すぐれて戦後50年代のイギリス歴史学界に台頭し、60年代には通説の地位を確立した学説で、いうまでもなくわたしの考えは、このイギリスの学界動向に大きく依存していた。この新学説は、戦前のイギリスに支配的であったホイッグ―フェビアン系の進歩史観（19世紀についていえば中流階級興隆史観）とは対照的な性格をもち、何よりも19世紀イギリスにおける支配の現実を直視したところにその一特色があった。それまでも決して知られていなかったわけではないが、イギリスとは、工業化の進展と中流階級の興隆にもかかわらず、西欧では希有の大土地所有制が1870年代までまったく無傷で生き残っていた国だったのであり、またそのときまでその地主階級を中核に、ブルジョワジーではなくジェントルマンが、国制の中心機関である議회를圧倒的に牛耳っていた国でもあったのである。

それでは19世紀イギリスの支配の根本にかかわるこれらの事実をマルクスやマルクス主義者が知らなかったのかといえば、決してそうではない。マルクスはもちろん、19世紀にかかわるマルクス主義史家も、多くはこれらの事実を承知していた。問題はこれらの事実をどう解釈するかで、この点でマルクス主義には、史的唯物論に根差す独特の方法論があった。それは経済の下部構造の変化が、相互に交互作用はあっても、最終的には政治や法制や文化の上部構造の有りようを規定するという考え方⁶⁾で、一般史家のあいだでは、当時は基底(体制)還元論といわれ、今では概して経済決定論の名で知られている。そしてこの方法論によるなら、19世紀イギリスの地主階級は、たとえ国家権力の座にあったとしても、彼らはもはやブルジョワジーの意向をただ代行しているにすぎなかったのであって、真の支配階級はブルジョワジーなのだと解釈された。もっとも19世紀のいつごろから地主階級はブルジョワジーの支配を代行するようになったのかということについては、論者によって意見の相違があった。この方法論に立つ1960年代のわが国の通説は、1832年の第一次選挙法改正と46年の穀物法廃止をその決定的な契機と見なしていた⁷⁾。だが当のマルクスがそのような見解を最初に打ち出したのは、わたしの知るかぎりでは、1852年であった⁸⁾。また次に述べる吉岡昭彦氏によるならば、1867年の第二次選挙法改正後の第一次グラッドストン内閣のとき(1868-74年。「イギリス自由主義の黄金時代」といわれる)が、そのようなブルジョワジーによる支配の完成期であった。

さて以上話はマルクス主義史学の学説という、いささかややこしい領域に入り込んでしまった。だがこれだけ説明しておけば、あとはわが自分史の物語があるだけである。

終戦から四半世紀がすぎた1969-71年という時期は、50年代に始まった高度経済成長が一つの極点に達したときで、わが国の西洋史学界にもさすがに大きな変化が兆していた。研究者の関心が多様化・細分化して拡散し始め、かつて歴史学界全体にそれなりのまとまりを与えていた大塚史学の求心力は、急速に過去のものとなりつつあった。それと符節を合わせるように、ちょうどそのころ岩波講座『世界歴史』全30巻(69-71年、索引のみ74年)が刊行され、ときの西洋・東洋両史学界の研究水準を糾合する形で地球の全地域にわたる全世界史の総括が行われた。そしてわたしはこの講座の第19巻(71年3月刊)で、19世紀前半のイギリスを担当することになった(第1章「イギリス自由主義の発達」)。

その論稿でわたしは、それまでのマルクス主義の解釈にもとづく19世紀イギリス史の通説を批判し、先述のごときジェントルマン支配の持論を展開した。わたしの19世紀前半に続き、19世紀後半のイギリスを担当したのは吉岡昭彦氏であった(同講座第20巻第1章「イギリス自由主義国家の展開」、71年6月刊)。氏は大塚久雄氏の直弟子の一人で、しばらく以前からフィールドを絶対主義期から19世紀に移し、精力的に資

本主義確立期の研究に取り組んでいた。氏の論稿はいうまでもなくマルクス主義の経済決定論にのっとっており、わたしの論とは対照的に、地主階級を産業資本の業務の代行者と規定して、その意味でブルジョワジーの支配が貫徹する19世紀後半のイギリス像を描き出した。

同じ71年の11月に、今度は東京大学史学会の西洋史部会が「近代イギリス史の再検討」と題するシンポジウムを行った。このシンポジウムの意図は、今歴史意識の大きな転換が進行しつつあるという認識に立って、戦後大塚史学を通じてわが国歴史学の核心を担ってきた近代イギリス史の意義を再検討しようというものであった。そしてわたしはこのシンポジウムに呼び出されたのである。5人の論者が報告したが、なかでも吉岡氏の報告が当日のハイライトであった。氏はその場に出席した越智武臣、松浦高嶺、今井宏、米川伸一、篠塚信義、川北稔の諸氏とそれにわたしを「再検討派」と見なして俎上に載せ、マルクス主義史学の立場から方法論も含めて総攻撃ともいえる全面的な批判を開陳した。わたしは岩波講座に書いた一論をもって批判の対象とされたが、その批判がどういうものであったか、またわたしがそれをどう受けとめたかについては、当日のシンポジウムを記録した柴田三千雄・松浦高嶺編『近代イギリス史の再検討』（御茶の水書房、1972年）に詳しいのでもう述べない⁹⁾。1例をあげて結論的にいうなら、吉岡氏の議論は、講座派の代表作、山田盛太郎『日本資本主義分析』（岩波書店、1934年）を読むことが前提となっており、わたしの意見とはただすれ違っただけであった。とはいっても、当日のわたしは、東大本郷の大教室を埋めつくした聴衆を前に名指しで批判され、頭がボーとしてその場では何をいったかよく憶えていない体たらくであった。

◆吉岡先生のこと

最後に吉岡昭彦氏のことを少し書いておきたい。

氏とわたしは同じ事実を見つめても、その捉え方は水と油のように合わなかったわけだが、それでもわたしは、氏を研究者としても一人の個人としても敬愛していた。それゆえ以下、氏のことを、会えばそう呼んでいたように、先生と呼ぶことにしたい。

わたしは平素先生とはほとんど付き合いはなく、学会と、また和歌山大学在職中は国立大学の図書館長会議のときなどに、たまたま顔を会わせるぐらいのものであった。だがわたしは、人生のある一期間、いうなれば集中的に先生と付き合い、その人柄に触れることができた。それは1973年の9月から10月ごろから翌年の3月にかけてで、わたしたちは文部省の在外研究員として、ともにロンドンBroadway Shoot Up Hill (Kilburn High Road) の東裏手に連なるFordwych Roadの住人であった。わたしたちは大英博物館の図書室に通っており、よくそこで顔を会わせた。また先生は、多少寂

しがりやでもあったのか、駅からの道すがら、途中にあったわたしの下宿 (bed and breakfast) によく立ち寄ってくださった。わたしも二三度、先生の下宿にお邪魔した。先生は、4・5カ月にわたるマンチェスターでの研究を終えて最初にわたしの下宿に現れたとき、やおらカバンのなかから上記「再検討派」の最新の著作、青山吉信・今井宏・越智武臣・松浦高嶺編『イギリス史研究入門』(山川出版社、1973年5月刊)を取り出し、「これを読んであなたの考えはよく分かったよ」といわれた(わたしは本書で「第Ⅶ章 19世紀」を担当した)。そして以後わたしたちは、近代イギリス史の方法論についてもはや論じ合うことはなかった。それゆえわたしたちが留学中に語り合ったのは、学問の話題も含めてまさに四方山話であったが、とりわけインドについて熱っぽく語る先生の顔が忘れられない。先生はイギリスに来る前、1カ月ほどインドを旅し、ロンドンではインド関係の史料を読みあさっていた。そのとき聞いた話の多くは、帰国後ほどなく先生が世に問われた『インドとイギリス』(岩波新書、1975年)のなかに書き込まれている。

先生は文章も弁も立つ論理明晰の人であった。だがそれらにも増してわたしがかなわないと思ったのは、先生の研究にたいするエネルギー情熱であった。わたしは万事において出足の遅い怠け者で、大英博物館の図書室に着くのは、いつも早くて11時ごろだった。そのころにはあの円形ドームの大図書室にはデスクがなくなっており、わたしは概して屋根裏のような北図書室 (North Library) の常連であった。いっぽうの先生は、わたしが会うときはいつも円形ドームの図書室に座っていた。「先生、いつごろ来るんですか」と尋ねたら、「わたしはいつも博物館の門前に並んで開門を待っています」とのことであった。

1年に及ぶ留学生活の終わりの方で、先生は少し音をあげていた。しばらく博物館で見かけないので、どうしたのかと思い下宿を訪ねてみたら、先生は青ざめた顔でわたしを迎え入れてくれた。「いやー、ついに高熱を發してダウンしてしまいました。わたしはイギリスの食べ物もう駄目ですよ」といって先生は、自分でつくったなますの大根を肴に、ブドウ酒を飲んでいた。

先生は2001年11月12日、74歳で亡くなられた。病氣は肝臓癌であったと聞いている。平素先生とは音信もなかったためか、訃報はしばらくわたしのところには届かなかった。遅まきながらこの場をかりて、弔意を表させていただきたい。黙祷。

- 1) T.S.Willan, *The Moscow Merchants of 1555*, Manchester U.P., 1953; do., *The Early History of Russia Company, 1553-1603*, Manchester U.P., 1956.
- 2) 越智武臣『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、1966年、第2・3章を参照。
- 3) 中村英勝『イギリス議会史』有斐閣、1959年。同『イギリス議会政治の発達』至文堂、1961年。横越英一『近代政党史研究』勁草書房、1960年。
- 4) レーニン「労働者にたいするブルジョワ・インテリゲンツィアの闘争方法」『全集』、第

◆パレット◆

20巻、491頁。

- 5) D・G・H・コール（林健太郎・河上民雄・嘉治元郎訳）『イギリス労働運動史Ⅱ』岩波書店、1953年、2頁。
- 6) この考え方については、たとえば次を参照。「エンゲルスの」・プロッホ宛書簡、1890年9月21日付『マルクス=エンゲルス選集』大月書店、第15巻、527-28頁。
- 7) 拙著『近代イギリスの社会と文化』ミネルヴァ書房、2002年、第1章を参照。
- 8) マルクス「イギリスの選挙—トーリー党とホイッグ党」『ニューヨーク・デイリ・トリビューン』（1852年8月21日付）前掲『選集』、第6巻、82-88頁。
- 9) とくに吉岡昭彦「イギリス近代史研究の方法的再検討」と拙稿「19世紀イギリス史についての方法的一考察」を参照いただければ幸いである。